〈学術論文〉

『奥細道菅菰抄』と漢詩文（三）

塚越義幸

引き続き『奥細道菅菰抄』と漢詩文との関わりについて考察してみたい。

（十七）郊外に逍遙して犬追物の跡を一見し那須の篠原をわけて玉藻の前の古墳をとふ

郊－外ハ字－書ニ、邑外ヲ曰フ郊ト、ト村バナレノ野－地ナリ逍－遙ノ成語ハ俗ニ熟字ト云荘－子ニ見ヘテ俗ノ氣バラシト云意ブラ〳〵遊ビアリク「ナリ……

ここの注では、「予」が「黒羽の館代浄法寺何がし（図書高勝・桃雪）」とその弟「桃翠（翠桃）」に案内されて、ある日郊外を「逍遙」して犬追物の跡などを見て回った場面での「郊外」と「逍遙」の語釈を試みている。

まず、「郊外」は、字書の注〔1〕を挙げて「村を離

れた野」と、「逍遙」については「俗に言う気晴らしという意味で、ぶらぶらと遊び歩くこと」と解釈している。「逍遙」の出典として『荘子』が挙げられているが、それは言うまでもなく、篇名になっている「逍遙遊」の「逍遙」を指していると思われる。

『荘子鬳斎口義』内篇逍遙遊第一の「逍遙」の林希逸注では、

逍ー遙ト云ハ言ハ優游自ー在ナルヅ也。(2)

となっており、のんびりと気楽に思うままに行動するさまと注釈しており、梨一もこの辺りを踏まえたと考えられる。

「予」が村里を離れた野を気晴らしにぶらぶら散策していて、犬追物の跡をちょっと見て……という描写になるであろう。

この注は、『鈔』では、

逍遙ハ天遊也。遠ク見ルトニ無為ノ理ヲ一荘子ニ出。

となっている。一方『鼇頭本』では、

○逍遙　セウヨウ　俗ニ氣ばらしと云意ふら〳〵遊ひありく事也

と『菅菰抄』の出典は示していないが、意味をそのまま踏襲している。

（十八）感応しきりに覚えらる

感ー應ノ成語ハ易ニ出テ心ニ激ー受スルヲ云感ハ心ニ激スル所アルヲ云應ハウクルト訓ジアタルト訓ジ感ニ依テ來ルモノヲ云

ここの注では、前項の「郊外に逍遙して」に引き続き、さらに八幡宮（金丸八幡宮那須神社）に参拝し、そこが那須与一宗高ゆかりの神社であったことを聞いた時の感慨である「感応殊しきりに覚えらる」という表現の特に「感応」の語（左側に「アタリウクル」と訓じている）の意味を解説している。その用例として『易』が挙げられているが、『易経』「咸」彖伝に、

咸ハ感ナリ也柔上ニシテ而剛下モナリ二ー氣感応シテ以テ相與ニス(3)

とあるを指していると思われる。咸は感ずること。柔軟なもの勢いを増し、剛健なものの勢いが下がって、陰陽の二気が感応しあってお互い関与しあうのであるという意味で、この感応は「お互いに働きかけそれぞれが反応すること」と解釈できる。

梨一は、この用例を踏まえて「感応」を「激受する（心に強く感受すること）」と解釈し、「感」は「心に刺激的な感動を起こすこと」、「応」は「うける」「あたる」と訓読みして、「感動により生まれたもの」を言うと解したことになる。特に「感」に対し『易』の用例よりも「強く激しい」心の動きとして捉えようとしている点が特徴である。なお「感応」については、『日本国語大辞典第二版』では、

心が感じこたえること。また感動すること。

とあり、ここに挙げた『おくのほそ道』及び『易経』が出典として挙げられている。

ここでは那須の与一ゆかりの八幡宮をお参りして、心に強く感動を覚えたという意味に捉えることができるであろう。

この注は、『鈔』・『鼇頭本』ともに採られていない。

（十九）夏山に足駄を拝む首途哉

世ニ傳ヲ小ー角常ニ木ー屐ヲ著テ嶮ー岨ヲ行コ平ー地ノ如シト故ニ此像ハ必ス著屐ノ形チヲ作ル又世ー説ニ謝ー靈ー運屐ヲ著テ山ニ登ルコヲ載スコレラノタチ入レナルベシ

ここの注では、修験光明寺に招かれ、行者堂を拝んだ時の「夏山に……」の句に詠まれた役行者（役小角）像について触れている。いつも彼が「木屐（注の左側に「アシダ」と訓じている）」を「著（「ハク」と訓じている）」いて険しい山を平地のように歩いていたことから、必ず木屐＝足駄を履いたままになっていることを明確にしており、それにより、句では足駄を拝んでいると詠んでいることも示している。靴を履いて山に登る用例として、謝霊運のことを挙げ、出典としては『世説』としている。ここでは引用書目にあるように『世説』は『世説新語補』であろうが、謝霊運のことが示されている巻三「言語中」には注を含め、該当する事項は見当たらない。(4)

ただし、『奥のほそ道解』（後素堂著　文政十二年）では、

南史云、謝霊運、尋レ山陟レ巓必造二幽峻一、木履有、上レ山去二其前齒ヲ一、下レ山去二其後齒一。

とあるが、ここでは、『南史』巻十九の謝霊運の用例を挙げている。険しい山を上った結果、上りでは下駄

の前歯が、下りでは後ろの歯が削れてなくなってしまったことを示しているので、むしろ修行の苦難の跡を窺わせる内容である。

この注は、『鈔』には採られていないが、『鼇頭本』では、

夏山ニ足駄を拝む小角常ニ木履をはきてけんそを行事平地の如しと是等を取て足駄をおがむとよまれたるならんと。

と『菅菰抄』の前半をそのまま踏襲しているが、『世説』の用例は載せていない。

（二十）殺生石ハ温泉の出る山陰にあり

温ー泉ハ博ー物ー志ニ、凡ッ水ー源ニ有レハ二石ー硫ー黄一、其ノ泉則温ナリ、ト云リ

ここの注では、温泉の意味を『博物志』の例を用いて説明している。ただ今回調査した範囲（十巻本の和刻本）では、該当箇所は確認できなかった。(5)

この注は、『鈔』には採られていないが、『鼇頭本』では、

○温泉ハ水源ニ石硫黄ありて其泉温也

となっており、出典名『博物志』は示していない。

（二十一）墜涙の石碑も遠きにあらず

墜涙ハ、墮涙の誤なるべし晉ー書羊ー祜カ傳ニ云、祜樂ム二山ー水ヲ一、毎トニ風ー景一必ス造リ二峴山一ニ、置ー酒言ー詠終ー日不レ倦マ、祜死シテ後、襄ー陽ノ百ー姓、於テ祜カ平ー生遊ー憩ノ之處一ニ、建テ碑ヲ立テ廟ヲ、歳ー時ニ享ー祀ス、望ム二其ノ碑ヲ一者ノ、莫シ不ル「レ流サレ涕ヲ杜ー預因テ名ケテ爲二墮ー涙ノ碑ト一

ここの注では、「墜涙の石碑」について、先ず「墜」の文字の誤りに触れているが、本文ではそのまま「墜涙」の文字を用いている。またこの石碑の出典として『晉書』巻三十四「羊祜傳」を挙げている。佐藤庄司の城跡の傍ら古寺には一族の石碑があり、その中でも二人の嫁の墓碑には心を打たれ、感涙の涙が。それを中国の「墮涙の碑」に擬えたのである。

「墮涙の碑」は、中国晉の時代の羊祜を顕彰して建てられた碑であるが、『晉書』の記載によれば、羊祜は山水を楽しみ、素晴らしい風景に出会う度に、峴山に登って酒宴を設けて詩を詠み、終日遊興に耽ってい

た。彼が亡くなってから、彼の治めていた襄陽の人々が、彼が楽しんでいたその場に碑を建てお祀りを行った。その碑を望むものは誰もが涙を流したので、杜預が「堕涙碑」と名付けたということである。

この一連の話は、『晉書』以外にも『蒙求』「羊岵識環」やわが国の『連集良材』や『俳諧類船集』などにも所収されている。(6)

この注は、『鈔』では、

晉書羊祐傳ニ羊祐守タリ二襄陽ニ一卒シテ百姓為メニ建ツ碑ヲ望ム者ノ莫レ不ト云コトニ流涕セ一名二堕涙ノ碑ト一

（頭注　李太白　峴山臨ムニ漢江ニ一水緑ニシテ沙如シ雪ノ上ニ有リ二堕涙ノ碑一　青苔久ク磨滅ス）

となっており、『菅菰抄』より簡潔に示している。なお頭注の李白は「襄陽曲四首」の其三であり「堕涙碑」の用例として挙げている。

一方『鼇頭本』では、

○堕涙　ダルイ　晉書羊祐カ傳ニくハし祐を祀るニ碑　涙を流さゝる丁なし名つけて堕涙の碑トすと云……

とあり、かなり簡潔にまとめている。

（二十二）笈も太刀も五月にかざれ紙幟

類一書纂一要ニ云、武一人以テ二端一午ヲ一、于テ二用一武之ノ處ニ一、爲シ二穽一揚之技ヲ一、盡ク爲ス二鬪一勇之戲ヲ一……

ここでの注は、この句が詠まれた五月朔日（この句の後に「五月朔日の事也」とある）端午の節句に近く、甲冑を飾り武運を期す習慣に対する典拠の一例を示したものである。出典の『類書纂要』は引用書目に掲載されているが、題名にある通り類書の一種で、明の璩崑玉篇、天文・地理・時令・人道・身体・人事などに分類し、関連する語彙を集めてそれぞれ解説を加えている。ここでの解説は、同書巻之三の時令部夏・五月建午・射柳の全文である。(7)

「射柳」とは、端午の節句に馬に乗りながら柳の葉を射貫くことで、本来祭祀儀式の目的で行われていたが、後に娯楽のプログラムに発展していくが、それは解説の「闘勇の戲」という言葉でも明らかである。ここまで示すことが注としての意味があるかどうかは疑問だが、端午と尚武との関わりを示す用例としては意

義があると思われる。

芭蕉の句は、五月朔日には紙幟を飾るのが習慣であるが、医王寺に寺宝として収められているという「義経の太刀、弁慶が笈」（本文に示している）にちなんで、それらも飾って端午の節句の尚武の意義をより伝えて欲しいということになろうか。

この句の初案は「弁慶の笈をもかざれ」となっているが、ここでは本文に示されたように義経の太刀も登場するので、その流れから笈と太刀だけで義経と弁慶を両方の寺宝を挙げることに改案したのである。ただ実際、『曾良随行日記』は、

寺ニハ判官殿笈、弁慶書シ経ナド有由

とあり、医王寺の寺宝は義経の笈と弁慶の書いたお経であって、太刀は存在しない。この場面は、明らかに芭蕉のフィクションが含まれているが、『おくのほそ道評釈』（角川書店　平成十三年）の中で尾形仂氏は、

紙幟は眼前の戸外の実景、笈や太刀は心中の希求

という二句一章の形をとっている。

と述べられている通り、太刀はここでは不可欠な什物とみなしてあえてえ登場させ、虚実の取り合わせを巧みに活かした句に仕立てたと言えよう。

この注は、『鈔』・『鼇頭本』ともに採られていない。

（二十三）猶夜の余波心す、まず馬かりて桑折（コヲリ）の驛に出る

余ー波ハ波ー餘ト云國ー語ニ見タリナゴリト和訓スノコリノ┐ナリ……

ここでの注は、「飯塚温泉」での粗末な宿で寝苦しい一夜を経て、ようやく朝を迎えてまた旅立つ場面での昨夜の「余波」についての語句の意味とその用例を挙げている。用例については同義としての「波餘」が『國語』に見えると示されている。同書は魯の左丘明の撰とされ、春秋時代の主要八か国の歴史を記したもので、それぞれ「〈国名〉＋語」として分類している。ただこの「波餘」という用例は、熟語としては見当たらない。「波」と「餘」が一文の中で別々に出てくる部分としては、「晉語四」に、

其ノ波ニ及スル晉國ニ者ハ、君之餘ナリ也、又何ヲ以報ィン。（8）

がある。晉国に波及するものは君の残りものである

……という意味になろう。

ここは楚の成王が晉の公子重耳に贈り物を賜ろうとしたが、重耳が辞退しようとした場面である。王が重耳に対し、もし晉国に帰られたら、私に何を返礼として贈ってくれるかと問うと、重耳は畏まって「美人や玉帛などはすでに王君がお持ちですし、美しい鳥の羽やから牛の尾、象牙やさいの皮などはご当地の特産物ですし、晉国まで波及しますのは残り物ですので、何も返礼すべき物は見当たりません」と答えた。

最後の部分が引用された箇所に相当するが、梨一は波及と残りという繋がりで考えて、余波と同義で特に「ノコリ」という意味で捉えたということになるだろうか。いずれにしても「波餘」という熟語の用例としては捉え難く、ここでは「波及した残り」という語句としてしか受け取れない。

この注は、『鈔』では、

なごりとハ海に風はやミても猶波のたつをいふより、陳鴻か長恨哥傳にハ餘波をなごりとよみ、左傳には波の一字をもよみ……

とあり、『長恨歌傳』や『左傳』を引用している。『左傳』の僖公二十三年の伝に、前出の『國語』の用例と同文が示されている。(9)

一方『鼇頭本』では、

○余浪　ナゴリ

とあるだけで、『国語』については触れていない。

（二十四）あやめふく日也旅宿をもとめて

あやめふく日は五月五日を云此日艾菖蒲ヲ用ルヿハ按ルニ歳一時一記ニ云、此ノ日採リ艾ヲ爲レ人ヲ、縣テ門一上ニ以テ禳フ毒一氣ヲ、又云、以テ艾ヲ爲リ虎ノ形ヲ、粘ハリテ艾一葉ニ載レ之ヲ是ヲ艾人艾虎ト云本一草一綱一目ニ云、是ノ日切リ菖一蒲ヲ、漬テ酒ニ飲ムレ之ヲ或ハ加レ雄一黄少シ許リヲ除ク一切ノ悪ヲ、卜是レ等ノ遺一習ナルベシ……

ここでの注は、「予」はあやめを葺く日に仙台に入るが、その日すなわち五月五日に艾や菖蒲を用いる根拠を『歳時記』や『本草綱目』の用例を挙げて解説している。

最初の『歳時記』とは『荊楚歳時記』（梁　宗懍撰）のことで、その五月の項目に示されたものである。た

だ抜粋であり、主に艾（よもぎ）を用いる中国の由来のみを挙げている。(10) それによれば、この日によもぎを採って、それで作った人形を家の門に飾り、毒気を払い、またよもぎで虎の形を作って、よもぎの葉に貼り付けてそれを被る習慣があったということである。

また『本草綱目』の用例は、巻十九の「菖蒲」附方除一切悪の項目にある。これによれば、この日に菖蒲を切って、酒に漬けて飲んだり、雄黄（ヒ素の硫化鉱物で石黄とも、もともと黄色顔料として用いられていた）を少しばかり加えると一切の悪が取り除かれると。(11)

これら二つの漢籍から「艾」と「菖蒲」の用いられる伝統が明確になった。梨一は「あやめふく日也」とのみある本文に対し、その日の風習を中国の用例を引きながら、これらは我が国の今に残る習俗であると結んだ。

この注は『鈔』には採られていないが、『鼇頭本』では、

菖蒲ふく日

本艸綱目ニ云此日あやめを伐酒にひたしてのむ或雄黄少し斗を加ふれハ一切の悪をのそく此外諸抄ニ説多し

とあり、あやめに関する『本草綱目』の用例のみを挙げている。

『奥細道菅菰抄』下

（二十五）壺碑（ツホノイシブミ）

按ルニ庭中ヲツボト云ハ本ト壺ノ字ナルベシ音ェ梱爾（コン）ー雅ニ、宮ー中ノ街謂フ之ヲ壺ト、ト是ナリ瓶ノ属ヒノツボハ壺ニテ音ェ古（コ）ナリ然ニ今門ー内前ー栽ナドヲツボノ内ト稱ズルハ壺ト壺ト楷ー書ノ字ー形紛ラハシキヨリシテ終（并）ニ其和訓マデヲ誤ルナリ

ここでの注は、「壺碑」の「壺」と「壺」の字の字形の紛らわしさを『爾雅』釈宮の用例を挙げて、正しい字形「壺（音コン）」を示している。

「壺碑」は、当時の市川村多賀城（現在の多賀城市市川の多賀城址）にあったが、「予」が見たのは、そ

れではなく江戸時代初期に発見された「多賀城碑」である。本来の「壺碑」は歌枕でもあり、本文では「壺碑」として扱われている。

梨一はこの「壺碑」の「壺」の文字に拘って解説を試みている。この「壺」は庭中を言う場合は本来「壺」で、瓶の類の場合は「壺」であって、楷書では区別がしにくいと。『爾雅』釈宮に引く「宮中の衖（御殿の間の道　衖は巷の別体）を壺と言う」(12)や門内・前栽を「ツボ」の内という場合は、「壺」が正しいということで、ここでは「壺碑」とすべきの立場から、『菅菰抄』の本文では「壺」になっている。確かに壺の中の碑ではないので、「壺」が正しいという梨一の説は説得力がある。しかし野坡本をはじめ曾良本・西村本・柿衞本では、すべて「壺」のくずし字となっている。

この注は、『鈔』では採られていない。一方『鼇頭本』は、

碑ハ仙府ヨリ千賀の浦への往来の傍ラ市川村ニ有多賀城の前裁の壺の内ニ在し故つぼの碑と云壺の字宮中の道也壺音古也酒甕也混すべからす

と、『菅菰抄』の注をさらに明確にして、この碑が多賀城の前裁の「壺」の中にあるので、「つぼの碑」と言い、さらに『爾雅』の用例も引いて「衖」を道と訳している。「壺」と「壺」の混用についても注意を促している。

（二十六）山崩川落て道あらたまり石ハ埋て土にかくれ木ハ老て若木にかハれば

古－文前－集、李－白ガ蜀－道－難ノ詩ニ、地崩レ山摧ケテ壯－士死ス、文－選古－詩ニ古－墓ハ犂テ爲シ田ト、松－栢ハ摧テ爲スレ薪ト、卜是等ノ風－情ナルベシ

ここでの注は、「壺碑」の章で、歌枕の現況を「山は崩れ川は流れが変わり、(13)道も変わってしまい、石は埋まって土に隠れて、木は老いて枯れ若木に代わってしまっている」と述べた箇所の典拠として、李白の『古文真宝前集』所収「蜀道難」と『文選』所収「古詩十九首」の第十四首の一部を挙げている。

まず李白の「蜀道難」を全句挙げてみる。

噫嘘嚱危乎高哉
蜀道之難
難於上青天
蠶叢及魚鳧
開國何茫然
爾來四萬八千歳
不與秦塞通人煙
西當太白有鳥道
可以横絶峨眉巓
地崩山摧壯士死
然後天梯石棧相勾連
上有横河斷海之浮雲
下有衝波逆折之回川
黄鶴之飛尚不得過
猿猱欲度愁攀縁
青泥何盤盤
百歩九折縈岩巒
捫參歴井仰脅息
以手拊膺坐長歎
問君西遊何當還

噫嘘嚱危かな　高（い）かな
蜀道の難き
青天に上るより難き
蠶叢及び魚鳧
国を開くこと　何ぞ茫然たる
爾来　四万八千歳
秦塞と　人煙を通ぜず
西のかた太白に当て　鳥道有り
以て　峨嵋嶺を横絶すべし
地崩れ山摧けて　壯士死す
然る後　天梯石棧　相勾連す
上に河に横り　海を断つ浮雲有り
下には波を衝き　逆折するの回川有り
黄鶴の飛んで　尚を過ること能はず
猿猱度（ら）んと欲（す）るも　攀縁を愁ふ
青泥　何ぞ盤々たる
百歩九折　岩巒を縈らす
参を捫　井を歴て　仰（ぎ）て脅息す
手を以て　膺を拊で　坐して長歎す
君に問ふ　西遊何つか還るべき

畏途巉岩不可攀
但見悲鳥號古木
雄飛呼雌繞林間
又聞子規啼夜月愁空山
蜀道之難難於上青天
使人聽此凋朱顏
連峰去天不盈尺
枯松倒挂倚絶壁
飛湍瀑流爭喧豗
砯崖轉石萬壑雷
其險也如此
嗟爾遠道之人胡爲乎來哉
劍閣峥嶸而崔嵬
一夫當關萬夫莫開
所守或匪親
化爲狼與豺
朝避猛虎夕避長蛇
磨牙吮血殺人如麻
錦城雖云樂
不如早還家

畏途巉岩　攀づべからず
但見（る）　悲鳥の古木に号（する）ことを
雄飛び　雌を呼（び）て　林間を繞る
又聞く　子規夜月に啼て　空山を愁ることを
蜀道の難き　青天に上（る）より難し
人をして　此を聽て朱顏を凋ましむ
連峰　天を去ること　尺に盈たず
枯松倒に掛て　絶壁に倚る
飛湍瀑流　争（ひ）て喧豗
崖を砯き　石を転じて　万壑雷なる
その險きこと　此の如し
嗟　爾ぢ遠道の人　胡為ぞ来るや
劍閣峥嶸として　崔嵬たり
一夫関に当れば　万夫開くこと莫（れ）
守る所　或は親に匪ず
化して狼と豺とに為る
朝には猛虎を避け　夕は長蛇を避け
牙を磨し　血を吮て　人を殺（す）こと麻の如し
錦城　楽と云と雖ども
早く家に還んには如かず

蜀道之難難於上青天　　蜀道の難は　青天に上（る）より難し
側身西望長咨嗟　　身を側て　西に望て　長く咨嗟す（14）

この詩は、七言を基調とした雑言古詩である。題名の「蜀道難」は楽府題であるが、他の作品とは異なる長篇作で、李白の「蜀道」の険しさに対する強烈な思いが、さまざまな伝承や神話などを踏まえて豪華絢爛に描出されている。

この長篇は三つの「蜀道之難難於上青天」の句によって、主題が二つに分けられている。最初の句は、発語とも言うべき提言として示されたが、二回目は仙界とも言うべき蜀の道の自然の厳しさを、三回目は人事の厳しさともいうべき戦の愚かさ、人間の残虐さを暗示的に詠み、都も安堵の地ではないと進言する。そして、それぞれ蜀への道が青い空に上るより難しいと結ぶ。

梨一はこんな長篇の中から、『おくのほそ道』の本文に該当する典拠として「地崩山摧壯士死」の一句のみを挙げた。「蜀道難」では、この句は昔の蜀の伝説（『蜀王本紀』や『華陽国志』に見える）を示した場面である。

秦王が蜀王に五人の美女を贈り、蜀王は五人の屈強な男たちを迎えに出した。帰る途中、一匹の大蛇が穴に入りかけているのを見て、五人の男たちはその穴から大蛇を引きずり出そうとした。すると山が崩れ皆圧死して、山頂で石に化けた。

このような伝説を踏まえ、李白は「こんなことがあって、天への梯子のような山道や絶壁に渡した桟道がつながるようになった」と述べたのである。

梨一がこのような伝説をどこまで踏まえようとしていたかは不明であるが、わが国の歌枕もさまざまな伝承を持ちながらも、「山崩れ川の流れも変わってしまった」のだと注釈したかったのだろうか。

次に「古詩十九首」も全句挙げてみる。

去者日以疎　　去る者は　日々に以て疎（うと）し
生者日以親　　生ける者は　日々に以て親たし
出郭門直視　　郭門を出て　直ちに視る
但見丘與墳　　但　丘と墳とを見る

古墓犂為田　古墓犂（すか）れて　田と為り
松栢摧為薪　松栢摧（くだ）かれて　薪と為る
白楊多悲風　白楊　悲風多し
蕭蕭愁殺人　蕭々として　人を愁殺す
思還故里閭　故（もと）の里に　還んことを思ふ
欲歸道無因　帰らんと欲して　道因（よし）無し(15)

この詩は、特に一句目が『徒然草』第三十段に引用されるなど、わが国でもよく知られている（ただし「去る者は追わず」と混同される傾向があるが別ものである）。

去る者（あの世に旅立った者）は、日に日に忘れ去られていくが、生ける者（誕生してくる者）は日に日に皆に親しまれていくもので、郊外に出ると到る所に墳墓が。しかし長い年月が経つにしたがって、「古い墓は鋤き砕かれて農地になり」、「長寿の樹木松やこのてがしわも切り倒され、薪にされてしまう」。白楊を吹く風は悲しげで、人を愁いに誘う。故郷に帰ろうとしても、ここは異境の地、その道順を忘れてしまった。

梨一はこれらの詩句のうち、五句目六句目のみを引用して、歌枕が長い年月の間、石に埋もれ、そこに生えていた樹木の代替わりしていったことに詩情を重ねようとしたのであろう。もちろん『おくのほそ道』では、墓も松柏も直接は関係ないが。尾形仂氏は、『おくのほそ道評釈』（前出）で『菅菰抄』のこれらの漢詩を引き、

必ずしもこれらの詩句のどれを想起したというのではないが、「是等の風情」により以下の漢文流の対句仕立てで高揚した心をつづっている点に注意すべきだろう。

と述べられているが、「蜀道難」の例でも詩句の直接の情感ではなく、それを包含する「風情」を捉えさせようとしての引用であり、同氏の説かれるように、その後の、

時移り、代変じて、其跡たしかならぬ事のミを、爰に至りて疑いなき千歳の記念、今眼前に古人の心を閲す。行脚の一徳、存命の悦び、羈旅の労をわすれて、泪も落るばかり也。(16)

と続く漢文調・対句表現への導線として、これらの「蜀道難」と「古詩十九首」の詩句が断章取義として十分効果的であったと言えるのではないだろうか。

この注は、『鈔』には採られていない。一方『鼇頭本』は、

古文前集ニ李白カ蜀道難の詩ニ地崩山摧ケテ壯士死文選古詩ニ古墓ハ犂スキテ爲レ田松栢ハ摧コリテ爲レ薪ト

となっており、若干の訓読に違いが見られるが、『古文真宝前集』「蜀道難」と『文選』「古詩十九首」が引用されている。

（二十七）千歳の記念今眼前に古人の心を閲す

……閲ハ字書ニ歴觀ナリ也トアリ見メグラスコナリ

ここでの注は、「壺碑」は疑いもなく千歳のかたみで、今目の前に古人の心を「閲す」思いだとの場面の「閲す」の語釈を試みている。その「閲」の文字の意味を「字書」を引いて「歴觀」（見めぐらすこと）と解釈しているが、その「字書」とは『字彙』に、

雨月ノ切音越觀ル也歴ル也（17）

とあるが、これを踏まえてのことか。

この注は、『鈔』では、

字彙閲ハ觀ル也猶略出ス

と出典を『字彙』と明確に示している。『菅菰抄』でも同様『字彙』を参照していたと思われる。一方『鼇頭本』では、

閲　ケミス

と読みを示しただけで、字書の意味は採用していない。

（二十八）行脚の一徳存命の悦び羈旅の労をわすれて

……羈旅の労をわすれてとハ詩ニ所レ樂ムヲ自ラ忘レル疲ヲと云サマナリ

ここでの注は、「壺碑」を目の当たりにして、古人の心を見めぐらせることができ、そこに「行脚の一徳」「存命の悦び」を実感し、「羈旅の労をわすれて」感動の涙を流した箇所の「羈旅をわすれて」の意味を、詩の一句を引用して解説を行っている。「羈旅の労をわすれて」とは、「快楽のあるところでは、自然に疲れを忘れる」と言う詩句の趣を含んでいると言うことになろう。ただ、この詩句については、今回の調査では出典を明らかにすることができなかった。

この注は、『鈔』・『鼇頭本』ともに採られていない。

（以下続く）

［注］

（1）この注は『爾雅』釈地では、「邑外謂之郊」となっている（寛政六年刊『爾雅注疏』（早稲田大学図書館古典籍総合データベース）が、『字彙』（寛文十一年刊）では、『爾雅』を引いて梨一の注のように「邑外曰郊」と引用している。『爾雅』も『字彙』もいずれも『菅菰抄』の引用書目にあるが、梨一は『字彙』から引用した可能性が高いと考えられる。

（2）寛文五年刊『荘子鬳斎口義』による。句読点は筆者が加えたところがある。以下原文引用に関しては同様。なお『奥細道百代抄』では、この林注をそのまま引用している。拙著『芭蕉俳諧に表現された漢詩文の研究』（おうふう　平成三十一年）二百五十六頁参照。なお『荘子鈔』（正保二年刊）には、

　逍遙ハ、活計ニタノシンテ、物（モノ）我相忘テ、自在ナヲ云ソ。

とある。

（3）延宝二年刊『易経本義』下彖伝による。

（4）元禄七年刊・安永八年刊（校正改刻）によるが、その中で謝霊運の項目は、彼が好んで「曲柄笠」を用いたことが示されているのみである。『世説新語』には、謝霊運は他の項目には掲載されていないので、梨一の誤りか？

（5）後のものではあるが、『温泉考』（原双桂　寛政六年刊）

　その外張華が博物志、胡仔が漁隠叢話の類、いくらも温泉のうわさを説しことばは見へたれ共、實にその理を知り、くわしくその功を論ぜしふみは、儒書にも醫書にも曽て見へ侍らず。（京都大学貴重資料デジタルアーカイブスによる）

と『博物志』に温泉の事が書かれていることが示されているが、その出典は何であったのか、今のところ不明である。

（6）拙著『芭蕉俳諧に表現された漢詩文の研究』（前出）二百六十一～二頁参照。

（7）『和刻本類書集成　第五輯』（汲古書院　昭和五十一年）所収『古今類書纂要』（寛文九年刊）

による。

（8）文化六年刊『國語定本』（早稲田大学図書館古典籍総合データベース）による。

（9）拙著『芭蕉俳諧に表現された漢詩文の研究』（前出）二百六十三～四頁参照。

（10）『和刻本類書集成　第十一輯』（汲古書院　昭和五十四年）所収『荊楚歳時記』（元文二年刊）による。この版本は当時流布していたようだが、後半の「又云」以下は本書には見当たらない。当時の和刻本ではないが、『東洋文庫324荊楚歳時記』所収の本文（宝顔堂秘笈本）には後半も見える。

（11）寛文十二年刊『校正本草綱目』（人文学オープンデータ共同利用センター　日本古典籍データセット）による。

（12）注1と同様、寛政六年刊『爾雅注疏』（早稲田大学図書館古典籍総合データベース）による。なお『字彙』でも「壺」の項目の用例として、『爾雅』のこの例が掲載されている。また『書言字考節用集』（槇島昭武　享保二年刊）にも、

壺與二酒壺ノ字一不レ仝　宮中ノ巷ー路也ト出

爾雅

と『爾雅』を引用している。

（13）この箇所は野坡本・曾良本・西村本・柿衞本などでは「川流れ」となっており、元禄版・明和版（早稲田大学図書館古典籍総合データベース）では「川落て」になっている。

（14）宝暦十二年刊による。

（15）元禄十一年刊『文選傍訓大全』による。

（16）注13と同様、明和版による。ただし句読点は筆者による。

（17）注1と同様、寛文十一年刊による。